

【問題】

Burke was so far from being a gaudy or flowery writer, that he was one of the severest writers we have. His words are the most like things; his style is the most strictly suited to the subject. He unites every extreme and every variety of composition; the lowest and the meanest words and descriptions with the highest. He exults in the display of power, in shewing the extent, the force, and intensity of his ideas; he is led on by the mere impulse and vehemence of his fancy, not by the affection of dazzling his readers by gaudy conceits or pompous images. He was completely carried away by his subject. He had no other object but to produce the strongest impression on his reader, by giving the truest, the most characteristic, the fullest, and most forcible description of things, trusting to the power of his own mind to mould them into grace and beauty.

出典：William Hazlitt, "Character of Mr Burke (II)", *Political Essays* (1819).

【訳例】

バークは、派手な、美文調の文体を持つ物書きとは程遠い、我が国で最も無駄のない文章を書く者の一人であった。彼の言葉は事物にすこぶるよく対応し、文体は主題に厳密に合致している。彼は文章構成法のあらゆる極端とあらゆる変化とを結合させ、最も平易で平凡な言葉や描写を、最高の言葉や描写と結びつける。彼は、力を誇示し、思想の広がり、力強さ、深さを示すことを大いに喜ぶ。凝った比喻や大げさな印象で読者を惑わすことを好む気持ちからではなく、ひたすらに自分の想像力の衝動や激しさに導かれている。バークは、自分の主題に心を奪われていたのである。彼には、物事を最も正確に、最も特徴的に、最も十全に、そして最も効果的に描写することで読者に非常に強い印象を与えようという以外に、目的はなかった。そうした描写を優雅で美しい文体に形作ることが出来る自分自身の精神力を信頼していたのである。

【解説】

Burke was so far from being a gaudy or flowery writer, that he was one of the severest writers we have.

far from は強い否定。gaudy, flowery は、ここでは余りよい意味で用いられていない。特に gaudy は、文体に対して用いられると「凝りすぎて趣味が悪い」という意味合いになる。

so ~ that 構文が用いられているが、ここでは前後の内容からして、はっきりした「結果」を意味するような訳にしない方がよいだろう。ちなみに、Burke とは Edmund Burke(1729-97)。アイルランド生まれの英国の政治家(ホイッグ党)で、雄弁家・著述家として知られている。青字にした語句が、文人としての Burke に対する筆者の積極的な評価であることに注意。

gaudy or flowery と severest とが対比的に用いられているので、それを訳に生かそう。

「バークは、派手な、美文調の文体を持つ物書きでは決してなく、我が国で最も無駄のない文章
在宅教育と研究支援の英学院

を書く者の一人であった。」

His words are **the most like things**; his style is **the most strictly suited to the subject**.

この the most は、両方とも絶対最上級に近い。絶対最上級では a most となるのが一般的だが、the を用いることもあるので要注意。文脈から判断する必要がある。

words が like things であるとはどういうことかと迷うだろうが、第1文の説明なのだから、それに沿って訳せばよい。ここでは、like things = concrete, not abstract という意味。後半は分かりやすいだろう。Burke の文体を例に挙げ、よき散文の特徴が述べられていると考えればよい。

この文の時制が現在形なのは、パークは故人だが、彼の文章は筆者の（そして読者の）目の前にあるから。

「彼の言葉は事物にすこぶるよく対応し、文体は主題に厳密に合致している。」

He unites {every extreme} and {every variety} of composition; **[he unites]**{the lowest} and {the meanest} {words} and {descriptions} with the highest **[words and descriptions]**.

この一文は、構文上は共通構文で、赤字で書き足した箇所が省略されている。

この文は訳が難しい。下線を引いた共通構文に注意しよう。また、語義選択で迷うことだろうが、前文まで筆者は Burke の文体を高く評価しているのだから、ここで何の前触れもなく逆の評価となることは考えられないので、よい評価を下していることを念頭に置いて、読む側にそれが伝わるように訳そう。

セミコロンの前は unites の目的語が {every extreme} and {every variety} of composition、セミコロンの後ろは、目的語 {the lowest} and {the meanest} {words} and {descriptions} を with 以下と結びつける、という構造になっている。

「彼は文章構成法のあらゆる極端とあらゆる変化とを結合させ、最も平易で平凡な言葉や描写を、最高の言葉や描写と結びつける。」

He exults {in the display of power}, {in shewing <the extent>, <the force>, and <intensity> of his ideas}; he is led on {by the mere impulse and vehemence of his fancy}, not {by the affection of dazzling his readers by gaudy conceits or pompous images}.

前文に続き、Burke の文体の特徴が描写される。

{in the display of power}と{in shewing <the extent>, <the force>, and <intensity> of his ideas}が並列で、さらに{by the mere impulse and vehemence of his fancy}と(not){by the affection of dazzling his readers by gaudy conceits or pompous images}が受動態の動作主を A not B の形で表している。

前文よりは内容は掴みやすいだろうが、難しいのはセミコロン以降。語彙を少し解説しておこう。

in shewing = in showing shew は show の古い綴り。

fancy はここでは imagination と同義で、「空想、思いこみ」の意味はない。（「空想・思い込み」は新しい意味で、Hazlitt の時代には一般的ではなかった。）青字にしたところはプラス評価の単語なので、ふさわしい訳語をあてよう。

一方、not 以下、緑色にした箇所は、マイナス評価を意味する単語が続く。conceits は「凝った比喩」。

dazzling his readers だが、readers は動名詞 dazzling の目的語。

exult in ~ 「~を大いに喜ぶ」

Burke は政治家で雄弁家としても有名だった。政治家の演説（ただし、非常に巧みで教養のある）を思い浮かべながら訳すとやりやすいかも知れない。

「彼は、力を誇示し、思想の広がり、力強さ、深さを示すことを大いに喜ぶ。凝った比喩や大げさな印象で読者を惑わすことを好む気持ちからではなく、ひたすら自分の想像力の衝動や激しさに導かれている。」

He was completely carried away by his subject.

ここは前文までのまとめなのだから、訳語も慎重に選ぼう。

be carried away by ~ 「~に感動させられる、心を奪われる」

筆者は、Burke が自分の論じている主題を真剣に論じていたという、よい意味でこの文を書いていることに注意して訳す。

「パークは、自分の主題に心を奪われていたのである。」

He had no other object but to produce the strongest impression on his reader, by giving {the truest}, {the most characteristic}, {the fullest}, and {most forcible} description of things, [trusting to the power of his own mind to mould them into grace and beauty].

no other ~ but = no other ~ than

by giving + {最上級の形容詞} × 4 + description of things が共通構文を作っている。

[trusting ...]は分詞構文で、付加的に理由を表していると考えれば分かりやすい。

them は description of things。

まず、二つの副詞句を訳そう。

初めの副詞句は give + 動詞由来名詞だから「～する」と訳す。

by giving {the truest}, {the most characteristic}, {the fullest}, and {most forcible} description of things

「物事を最も正確に、最も特徴的に、最も充実した、そして最も効果的に描写することで。」

次は分詞構文。取り敢ず訳しておくが、全体を訳してからつながりを考える。

[trusting to the power of his own mind to mould them into grace and beauty]

「そうした描写を優雅で美しい文体に形作ることが出来る自分自身の精神力を信頼していたのである。」

では主節。no other ~ but に気を付けて訳そう。

「彼には、読者に非常に強い印象を与えようという以外に、目的はなかった。」